

キケロー著「老年について」岩波文庫、岩波書店、2004年1月24日刊を読む

- あなたの「克己心」「向上心」はかねてより、よく存じております。
- あなたは、アテナイから「教諭」と「思慮」を持ち帰った。
- 哲学というものは、それに従って生きるならば、一生、煩いなしに過ごせます。どんなに称賛しても十分ということはありません。

- 幸せな善き人生を送るための手だてを、何一つ持たぬ者にとって、一生はどこをとっても重い。
- しかし、自分で自分の中から善きものを残らず探し出す人には、自然のおきてがもたらすものは、一つとして災いと見えるわけがない。

- 何よりも、老年こそそういった種類のものなのだ。
- 人はみな、老年に達することを望むくせに、それが手に入るや否や、非を鳴らす。
- 愚か者の常なき心、理不尽はかくも甚だしい。



- 過ぎ去った年月は、いかに長くとも流れ去った以上、いかなる慰めをもってしても愚かなる老年を和らげることはできぬ。
- わしの知恵：自然を至高の導き手として、神のごとく従い服している。
- （人生にも）何らかの終わりが必ずやなければならない。
- ちょうど、木の実や大地の稔りが、時を経た成熟の後に、萎れたり、ぼとりと落ちたりするように、賢者はそれに、従容（しょうよう）と耐えなければならない。
- いかなる方策をもってすれば、老いの道行きを最も易く耐えることができるのか。

- 不平のない老年を贈る人をたくさん知っている。
- そういう人は、欲望の鎖から解き放されたことを喜びとし、身内の人から軽蔑されることもない。
- すべて、そのたぐいの不平は、性格の所為であって、年齢の所為ではない。
- 節度があり、気難しさや不人情とは無縁の老人は、耐えやすい老年を送る。



- 老年を守る最もふさわしい武器は、もろもろの徳を身につけ実践することだ。
- 生涯にわたって徳が涵養されたなら、長く深く生きた暁に、驚くべき果実をもたらしてくれる。
- 「徳はその人の末期（まつご）においてさえ、その人を捨て去ることはない」ばかりか、「人生を善く生きたという意識」と、「多くのことを、徳をもって行ったという思い出」ほど、喜ばしいことはないではないか。



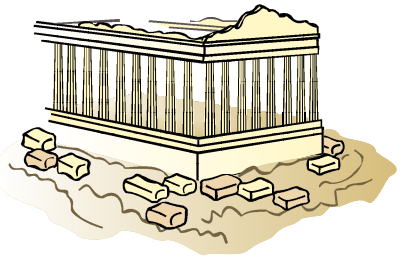
- 若年のわしが、まるで同年配のように敬愛した老将軍には、温厚さを加味した威厳が備わり、老年がその性格を変えてもいなかった。
- （その老将軍は）ローマ人にしては、豊かな文学の素養があった。国内に限らず、外国のことまで、あらゆることを記憶にとどめておられた。この人が世を去れば、教えを受ける人は誰もいなくなる。わしは、貪るように、あの方の談話を楽しんだ。

- プラトーンは、81歳の時、書きながら死んだ。
- ソクラテスは、94歳で作品を書き、その後、5年生きた。
- その師、ゴルギアースは、満百七歳を過ぎて、研究でも仕事でも片時も怠ることがなかった。
- 彼は、何故にかくも長くいきたいのか、と尋ねられて、「老年を咎めるべき謂われ（いわれ）を持たぬ故に」と答えた。
- 愚か者は、己の欠点や咎めを老年の所為（せい）にするものだ。



- 「思慮」「理性」「見識」を用いること。
- 無謀は若い盛りの、深謀は追いゆく世代の、持ち前。
- 老人の法律家、神祇官、哲学者。彼らは、年をとってもなんと多くのことを覚えていることか。
- 熱意と勤勉が持続しさえすれば、老人にも知力はとどまる。
- 世に聞こえた高官のみならず、野にあってひっそりと暮らす人の場合もそうだ。彼らがいなければ、種まきにしろ、作物の取入れにしろ、貯蔵にしろ、大切な農作業はほとんど何一つなされない。
- 「次の世代に役立つようにと、木を植える」「不死なる神々のために。神々は、私がこれを先祖から受けつぐのみならず、のちの世に送り渡すようにとも望まれた」

- 毎日、何かを学び、加えつつ老いていく。
- 年を取ってからギリシャの文学を学んだ。積年の渇きをいやさんとするがごとく、貪るように学び取ったので、今、お前たちの前で、範例として引用しているまさにこの諸知識が、わしのものになったのだ。
- ソクラテスは、それを立て毎に関して行ったと聞いているので、わしは、少なくとも、文学の方面で頑張った。

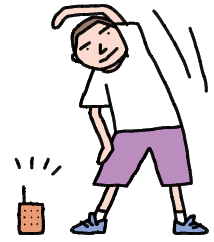


- 市民のために法律を教え示してくれた人たちの法知識は、息を引き取る間際まで推し進められた。
- 老人には、静かで気負いのない話しぶりがふさわしい。雄弁な老人の整然とした穏やかな演説は、それだけで傾聴を勝ち取るものだ。若者の熱意に取り囲まれた老年ほど喜ばしいものがあるだろうか。
- 教養を授ける師は誰も、体力がいかに老い衰えたとしても、不幸せとみなされてはならない。
- もっとも、そのような体力の衰えは、老年期というより、青年期の悪習の結果であることの方が多い。放蕩無頼の節度なき青年期は、弱り切った肉体を老年期へ送り渡すものだから。

○その舌から、蜜より甘い言葉が流れ出た。その甘美さのためは、何ら肉体の力を必要としなかった。

○元老院は、わしの体力を当てにしているのではない。

○だれか面会を求めてきた者にも、会う暇がないと断ったことがない。



○心が自分自身とともに生きるというのは、何と価値あることか。

○研究や学問という糧のようなものがいくらかでもあれば、老年ほど喜ばしいものはない。

○名を挙げた人たちは、老いてなおそれぞれの研究に情熱を燃やす。

○この情熱は、思慮深くきちんと教育を受けた人にとっては、年齢（とし）とともに育っていく。

○「自分は、日々、多くを学び加えて老いていく」

○このような「心の快樂」にも増して、大きな快樂は、決してないのである。

○農夫たちの喜び

○葡萄づくりの楽しみ

○農事の楽しみは山ほど数え上げることができる

○よく耕された農地



○青年期の基礎の上に打ち立てられた老年

2025年2月19日